

大学教育プログラムと連携した播州織の高付加価値化と地場産業の活性化の研究

STUDY ON THE IMPROVEMENT OF THE HIGH ADDED VALUE OF BANSHU-ORI AND REVITALIZATION OF LOCAL INDUSTRY UNDER THE COLLABORATION WITH UNIVERSITY EDUCATION PROGRAMS

渡邊 操 元・芸術工学部 ファッションデザイン学科 助教
野口 正孝 芸術工学部 ファッションデザイン学科 教授
佐野 浩三 芸術工学部 プロダクト・インテリアデザイン学科 教授
かわいひろゆき 芸術工学部 ビジュアルデザイン学科 教授
安森 弘昌 芸術工学部 プロダクト・インテリアデザイン学科 准教授

Misao WATANABE Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Former Assistant Professor
Masataka NOGUCHI Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Professor
Hirozo SANO Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Professor
Hiroyuki KAWAI Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Hiromasa YASUMORI Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Associate Professor

要旨

兵庫県には先染綿織物で有名な播州織の産地がある。本研究では産地と連動した播州織の高付加価値化と地場産業の活性化に繋がる大学教育プログラムを構築し、実施することにより、教育的価値を深める実践的研究を行った。

発想力・造形力・コミュニケーション力（伝達力）の三つの力の習得を目的としたプログラムを構築し、実践した。発想力では、播州織の特徴である綿という素材に着目し、綿花栽培を行った。造形力では、造形力の習得と播州織の活性化の取組みとして、播州織の生地を使用した衣服制作を行い、発表する際の見せ方も学生自ら考え、北播磨のイベントにて発表を行った。コミュニケーション力（伝達力）の習得として、小学生から大人を対象とした簡易織機を用いた織物ワークショップを実施した。

このプログラムを実施したことにより、学生は三つの力を習得でき、実践可能な教育プログラムを構築できたと考える。しかし、将来、産地での即戦力につながる人材を大学で育てるには、播州織の開発部分に関わるもしくは触れることが重要であり、第二弾として一歩踏み込んだ教育プログラムの構築が必要であると考えられる。今後の展望として、構築した教育プログラムが地場産業の活性化に繋がり、地域産業への理解や貢献、学生自身のものづくりに対する考え方・姿勢等に役立つことに期待する。

Summary

In Hyogo Prefecture, there is a production area of Banshu-ori that is famous for pre-dyed cotton fabric. Here, we conducted a practical study that deepens educational values through the establishment and implementation of a university education program that is linked to the production area and leads to the improvement of the high added value of Banshu-ori and revitalization of local industry.

We established and implemented a program aiming to acquire the three skills: creativity, prototyping, and communication skills. As for the creative skills, students focused on the material known as cotton, which is a characteristic of Banshu-ori, and performed cotton cultivation. Regarding the prototyping skills, students produced clothes using Banshu-ori and presented them at an event in Kita-Harima as an effort to acquire the ability to create prototypes and revitalize Banshu-ori production. Students held a weaving workshop using a simple loom for elementary school students and adults to acquire communication skills.

Students were able to acquire the above three skills in this program, and we seem to be able to establish an educational program that could be put into practice. However, in order for universities to develop human resources who are ready to engage in the production area in the future, it is essential for students to be involved and have hands-on experience in the developmental aspects of Banshu-ori, making it necessary to develop an educational program that explores these aspects further. The educational program that we have established is expected to contribute to the revitalization of local industries and develop the students' original ways of thinking and attitude toward manufacturing practices.

1.目的

兵庫県には先染綿織物で有名な播州織の産地がある。これまで純正国産制度「ジャパンクオリティ」の考え方に沿ったテキスタイルデザインによる播州織の高付加価値化を目的とした研究を行ってきた。同時に、産地と学生が関わるワークショップを行い地域の活性化を目的とした活動も行ってきた。しかしながら、学生が関わる活動ではコミュニケーション力を主に習得しており、今後の産地への興味や人材育成を考えると発想力や造形力の習得が弱く、強化が必要であると考えた。本研究では大学教育プログラムを構築し、播州織の高付加価値化と地場産業の活性化の実践的研究によって教育的価値を深めることを目的とした。

2.研究概要

教育プログラムを構築し実践的な研究として、発想力・造形力・コミュニケーション力(伝達力)の三つの力の習得を目的としたプログラムを組み実施した。また、播州織の高付加価値化として播州産地の企業と連携し生地制作を行い技術の更新に取り組んだ。

3.研究方法

教育プログラムの目的を明らかにするため、発想力・造形力・コミュニケーション力(伝達力)を図式化し、それに伴うプログラムを実施した(図1)。



(図1) 教育プログラムの目的

発想力では、播州織の特徴である綿という素材に着目し、綿花栽培を行った。世界的にエシカルファッションへの関心が高まっているという現状を踏まえ、本学ファッション

デザイン学科学生有志で、原料である綿を栽培し、材料となる糸を紡ぎ制作した。天然繊維である綿を育て成り立ちを知るにより、企画やデザインをする際の発想力向上を目的とした。

造形力では、造形力の習得と播州織の活性化の取組みとして、播州織の生地を使用した衣服デザインから制作を行い、発表する際の見せ方も考え、北播磨のイベントにて発表を行った。

コミュニケーション力(伝達力)の習得として、小学生から大人を対象とした簡易織機を用いた織物ワークショップを産地にて実施した。地場産業である織物について知る機会であり、織物の仕組みや織る楽しさを伝えることを目的とした。また、学科をまたいだ取り組みとして、このワークショップで使用する織り道具を考案し、プロダクト・インテリアデザイン学科学生有志の協力を得て制作を行った。

これらのプログラムの実施は授業外での活動であるため、学生に負担のない可能な範囲で年間スケジュールを組んだ(図2)。綿花栽培の種を蒔いてから収穫までの期間中に衣服制作・発表およびワークショップを行い、10月末頃に綿の収穫を行い、糸紡ぎを行う計画を建て実施

作業項目 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
綿花栽培		種まき				夏 →	収穫		紡ぐ			春季 休暇
ワークショップ			○			夏 → 休 暇	○					春季 休暇
衣装制作		制 作					→ 発 表					春季 休暇

した。

(図2) プログラムの年間スケジュール

技術更新として播州産地の企業と連携し、極細の綿糸を先染めし、経糸と緯糸に用いた先染め織物の開発を行った。

4.研究成果

4-1.綿花栽培の成果

学内で栽培場所を確保し、5月中旬に種をまき、台風で倒れそうになる危機を乗り越え、10月中旬頃、無事に収穫

することができた。収穫後、綿の種をとり、糸を紡ぐ実習を学内で実施した。時間の関係でその紡いだ糸を使用し織ることはできなかった。しかしながら、学生の感想として、収穫できるまで半年かかることや、綿がどうやって成るのか知ることができたであった。種から糸にするまで費やした労力と時間を学生は体感できたと考える。

4-2.衣服制作の成果

産地での発表を目標とし、播州織の産地である西脇市へ生地を買い付けに行き、綿素材である生地を活かしたデザインと制作を行った。このプログラムに参加していない学生も含めたファッションデザイン学科2年生3年生を中心に有志で活動を行った。播州織は綿素材のチェック生地も有名であり、チェック柄を取り入れた衣装を制作した学生もいた(図3)。



(図3)

学生デザイン
左：山田青佳
右：籠谷彩香

発表は2019年10月26日兵庫県三木市にある三木総合防災公園にて開催されたイベント「ふれあいフェスティバル in 北播磨」のファッションショーにて実施した。ショーでの見せ方や構成など成羽学(非常勤講師)の協力のもと学び、学生自らがショーを構成し実施した。学生はデザインや衣装制作で造形力の強化ができたと考える。造形力以外にも、モデルの手配や当日の移動、進行などショーを行うことによる様々な仕事があるということを学ぶことができ、学生にとって今後役立つ大きな経験となったと考える。

4-3.ワークショップの成果

ファッションショーを開催したイベントと同会場にて子供

から大人を対象とした織物のワークショップを実施した(図4)。このワークショップでは播州織の特徴でもある綿糸を使用し、チェック柄を織り、コースターを制作するという内容である。学生と一緒に、事前に学内にて簡易織機に経糸をかけ、コースターのサンプル制作を行った。同時に、学生は来場者に教える側になるため、学生同士で教え合い、間違えやすい工程を把握するなど準備を行った。ワークショップ当日、40分待ちでも体験する来場者もあり、盛況のうちに終わることができた。来場者の声として、『播州織は綿素材なのですね』『屋外のイベントで織物体験が珍しく参加した』『織をしてみたかったが機会がなかったので体験した』などがあった。学生にとってワークショップを通じてコミュニケーション力を習得できたと同時に、播州織の普及や活性化へと繋ぐきっかけにもなったと考える。



(図4) 織物ワークショップ風景

また、屋外でのワークショップ開催となるので、経糸の準備をワークショップの会場でもできるように織機に糸を掛ける為の道具である整経具(図5)を考案し、プロダクト・インテリアデザイン学科の学生協力のもと制作し、会場にて使用することができた。この整経具はワークショップ会場や授業でも使用する事ができ、領域を超えた取組みを行う事ができたと考える。



(図5) 整形具

4-4.先染織物開発の成果

先染め織物の開発を播州産地にある企業と行った。織り上がった後に染める後染めの織物で160番単子の糸を使用したものはすでにある。160番単子の先染め織物はまだなく開発を行った。織ることはできたが、量産にはまだまだ課題が残っている。高度な専門知識が必要であったため、学生はこの開発には加わらなかった。

今後の課題としてこういった技術開発にも学生が加わることができるような取組みが必要であると考ええる。

5.まとめ

1年を通してこの教育プログラムを実施し、発想力・創造力・コミュニケーション力(伝達力)の強化ができ実践可能な教育プログラムを構築できたと考える。しかし、将来の即戦力につながる人材を育てるには、播州織の開発部分に関わるもしくは触れることが重要である。開発に関わるには高度な専門知識が必要であり、例えばこのプログラム参加2年目の学生が開発に関わるなど第二弾として一歩踏み込んだ教育プログラムの構築が必要である。今後の展望として、構築した教育プログラムが地場産業の活性化に繋がり、地域産業への理解や貢献、学生自身のものづくりに対する考え方・姿勢等に役立つことに期待する。